

# 宮川先生を悼む

工藤英明\*

「皆様、戦後51年、明けましておめでとうございます。」  
このようなくだりではまる天田財団選考・企画委員長宮川松男先生の、新年の挨拶と抱負とが飾るはずであったこの場所に、委員の中の最年長とは申せ、私が哀悼の言葉を書くことになろうとは、生まれて初めての悲しい仕事始めになりました。

宮川先生は去る12月23日夜9時、ご家族やお弟子さんたちが見守る中で静かに息を引き取られました。

宮川松男先生が昭和20年に大学を卒業されて今日まで挙げてこられた塑性加工技術の研究と普及の大きな業績について語る資格は私にはございません。ここでは、天田金属加工技術振興財団に関わる宮川先生の業績に限って書かせて頂きます。

ご承知のようにこの財団は、金属等の塑性加工に必要な機械に関する基礎的、応用的な技術並びにその関連技術の研究に関わる助成を通じて、塑性加工機械に関する技術の向上により我が国の産業及び経済の健全な発展に寄与することを目的とし、(株)アマダの天田勇名誉会長の巨額の私財寄付金を主とする基本財産により、昭和62年5月、通商産業省の許可を経て設立された財団法人であります。宮川先生はこの設立総会において財団評議員に、6月には選考委員に選任され、11月の第1回選考委員会の席上、委員長に選任されました。その後、平成2年4月には理事にも選任されましたが、この間今日に至るまで、私共選考委員会、企画委員会の長として、金属等の塑性加工に必要な機械及び加工システム技術の調査・研究に対する助成、それらに関する国際交流の促進及びその助成とこれらの成果の普及啓発事業等の計画、実施の先頭に立って来られました。

この助成事業は財団設立の昭和62年から平成7年まですでに9年間にわたっており、この間に支給された研究開発及び奨励研究助成金の総額は平成7年11月末現在、300件6億5840万円、国際会議等開催準備、国際会議等参加及び、外国人技術者養成援助などの助成金総額は84件3,400万円に及んでいます。宮川先生が口癖のように言っておられたように、この金額は、塑性加工に関連して配分された、文部省科学研究費補助金の何倍かに当たり、それを見ても、天田財団の助成事業が、大学、高専、学協会とこれらに準ずる研究機関に所属する研究者個人と団体にとって、塑性

加工に関する技術の研究開発活動のどれだけ大きな助けとなったかお解り頂けると思います。又、これらの助成成果の普及のために、財団から平成1年以降毎年1回、「研究概要報告書・国際交流報告書」が産官学の関係方面に配られています。さらに講演討論会「FORM TECH」の開催と機関誌「FORM TECH REVIEW」の発行が、平成3年～6年まで毎年行われました。これらの企画、実施も宮川先生のイニシアティブによるものであります。宮川先生は、この大事業に本当に情熱を捧げられ、少なからぬ時間を費やしてこられました。泊まりがけの選考委員会の宿舎と一緒に風呂に入りながら、また同じ部屋で枕を並べて横たわりながら、財団事業の将来について話合ったことなど、今も目を閉じると次々に思い出されます。

ここで先生の御冥福をお祈りする前に、私共残された者がしっかり考えておかななくてはならないことがあるような気が致します。戦後50年の平成7年は本当に大変な1年でした。前の大戦の決着をつけるどころか、未決着の国際・国内問題が次々に吹き出てきました。戦後の日本国民の営々とした復興努力、とくに生産技術の推進がブーメランとして襲いかかってきた経済的、政治的負担が急に厳しくなった年でもあります。そして年の初めから恐るべき天災と、科学技術を悪用した人災が引き起こされました。戦後51年目は決しておめでたくはないのです。にもかかわらず、私共は新しい物質的価値を産み出し続けなくてはなりません。情報化といえども、これを助けるべきものです。しかし難しいのは、物創りを地球に優しくどころか、地球を若返らせながら行なうという課題の解決です。塑性加工による物創りの研究調査と、その結果の普及に対して極めて大きな影響力をもつ天田財団の助成事業の遂行に当たる、又は今後当たるであろう当事者が決意を新たにして出発しないと、事態は手遅れになるかも知れません。

1月1日に届けられた年賀状の中で、宮川先生は私共に厳しい教訓を遺されました。「…小生2年ごとのくわだてをかかけ 親鸞の“あすあると思う心のあだざくら よわにあらしの吹かぬものかわ”を肝に銘じてきましたが、なかなか思うにまかせません…」これを肝に銘じて、私共は初めて「宮川先生、安らかに眠り下さい」と申し上げることができるのではないのでしょうか。

\* 横浜国立大学 名誉教授